

<書評と紹介> 菊池俊彦編 『北東アジアの歴史と文化』

伊藤, 博幸 / ITO, Hiroyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

78

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

93

(発行年 / Year)

2012-09-30

菊池俊彦 編

『北東アジアの歴史と文化』

伊藤 博幸

I

編者菊池俊彦氏は「はじめに」で本書のフレームや編集意図について次のように言う。「本書は、近年のわが国における北東アジアの歴史と文化の研究の成果を一冊にまとめたものである。本書には考古学と歴史学の分野の論考を中心に、形質人類学、文化人類学、言語学の分野の論考をも含めた広範囲な領域の最新の研究成果が所収されている。執筆者はいずれも第一線で旺盛な活動を展開している研究者、もしくは今後の活躍が期待されている新進気鋭の若手研究者である」と。すなわち学際的研究領域からのアプローチの書なのである。そして「(本書を) 通読して、読者は必ずしも北東アジアの歴史と文化に関する全体像を描き出すことができないかもしれない。(しかしながら北東アジアに関する専門書自体がきわめて少ない現在) 本書はそのような現実但至少でも新たな道を拓きたい、という執筆者全員の総意」のもと編集されたもので、「知られざる北東アジアの諸民族の歴史と文化の理解に」読者を誘うことも意図されている。

書評と紹介

ところで、本書編集委員会(白杵・加藤・中村)の「あとがき」によれば、本書編集の契機は、菊池俊彦氏の二〇〇六年三月の北大退職に係る記念企画にあるという。そこで編まれたのが単に各分野の論文を集めただけではない「北東アジア史に焦点を当てた本の出版」であった。異色の記念論文集ではある。

もともと「北東アジアは、ロシア沿海地方の全域、アムール川流域、サハリン、カムチャツカ半島、千島列島、さらには東シベリア、モンゴリアをも含めた広い範囲を指している。」(あとがき)この用語を定着させたのが、編者の菊池俊彦氏なのだから。「これに加えて本書では、北東アジアの歴史と文化が密接に関連している隣接地域をも包括している。すなわち先史時代の中央ユーラシア草原、古代の朝鮮半島、中世のモンゴル高原、そして古代・中世の北海道と北日本」地域をも含む論文を収める。

II

本書は、「はじめに」と「あとがき」「索引」を除くと、五部から構成され、三〇人の執筆者による三〇編の論考「コラム二編含む」を収める。

章立てでは、分野ごとに時代順に「第I部 北東アジアの考古学世界」「第II部 北東アジアの古代国家」「第III部 環オホーツク海の古代世界」「第IV部 北東アジアの中世世界」「第V部 北東アジアの民族接触」と配列し、各自の専門とする時代や領域に関するトピックを取り上げてまとめながら、新たな展望を示していくスタイルをとる。なお、ここでは煩瑣をさけるため、通例掲出

される目次一覧は省く。
以下、各部ごとに各論の紹介をしつつ若干のコメントを付していく。

第一部 北東アジアの考古学世界

第一部は、現地調査を踏まえて北東アジアの諸民族とその系統に関する人類学的考察、旧石器時代・新石器時代・初期鉄器文化の考古学的様相に関する見解などが、論文六、コラム一本に述べられる。

第一章 北東アジアの人類集団：松村博文・石田肇

松村・石田論文は、形質人類学の観点（歯の形態分析）から、初期の北東アジア人（北京周口店の山頂洞人など）が寒冷地適応を受けながら、ベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸に移住したこと、その後、北東アジア人は一層の寒冷地適応を受けたようであるが、そのルーツは定見をみていないのが現状だとする。従来より、北東アジア系集団の南下により東南アジアへの拡散が起こり、弥生人やそれ以降の日本人が北東アジア系モンゴロイドの遺伝的影響を強く受けていることなどが言われてきたが、このような諸説に検討を加え、「北東アジアのモンゴロイド系集団はアメリカ大陸へ拡散した後も、最終氷期にはさらなる寒冷地適応を受け、新石器時代の終わりには、居住域を拡大させながら中国南部を経て東南アジアまで南下し、その一部が弥生人として日本に渡来した」とする。

北東アジアの領域概念は、編者の菊池俊彦氏によって用法が深

められつつあるが、一方では松村・石田論文が指摘するように、「人類学、考古学、遺伝学、言語学など諸分野によって論議の視点が異なるので一概に定義することは難しい」側面もあるが、一般的には黄河より北方を北東アジアととらえることが多く、さらに人類学には例えば「モンゴロイド」と呼ばれてきた人々の成立と拡散という視点では、さらにその範囲は広くなるという。つまり北東アジア人は二万年の間に東アジアやアメリカ大陸の集団にまで拡散しているからである。

第二章 出シベリアの人類史：加藤博文

加藤論文は石器の考古学的分析、すなわち中期旧石器（いわゆるネアンデルタール集団の段階）以降の狩猟具の構成の検討と、後期旧石器の細石刃石器群の検討を通して、シベリアから東アジア、また北太平洋沿岸地域への集団の移住と拡散を考える。約四万年前の中期旧石器から後期旧石器への移行問題は、古代型人類から現代型人類の出現を考古学的痕跡としてどのように認識し、評価するののかという問題にかかわるが、植刃器である細石刃の出現も後期旧石器初頭（約四万年前）にさかのぼり、それは現段階において明らかにシベリアに端を発し、東アジア各地へ拡散したことを提示でき、集団拡散が推定できる考古学資料だとする。

第三章 アムール下流域のオシポフカ文化：長沼正樹

長沼論文は、日本列島の縄文草創期に相当して、石器組成が類似することから、縄文文化の起源との関連が注目されるアムール川下流域に展開するオシポフカ文化（後期旧石器から新石器時代への移行期に当たり、北東アジア最古級とされる土器の出現で知

られる)について、ハバロフスク市西郊にあるノヴォトロイツコ遺跡群とアシノローヴァヤ・リエーチカ遺跡群の著者自身の最新の発掘調査成果に基づいて、新石器時代の開始や最古の土器という論点に言及する。オシポフカ文化の年代は¹⁴C年代によれば、約一万二〇〇〇年前〜九〇〇〇年前と幅があるが、その多くは約一万一〇〇〇年前台に集中し、これは日本列島ではいわゆる縄文草創期後半の爪形文・多縄文土器群に相当するものである。ハバロフスク西郊の遺跡群の石器組成は多様な尖頭器を主体に、土器は平底、平坦口縁の厚手のもので深鉢を主体とすると考えられている。その得られた見通しは、(1)遺跡の自然的形成過程の問題(寒冷地性自然的攪乱と遺跡形成過程の問題をいかに解決するか)を考慮した上で、オシポフカ文化の内部での遺物の細分編年を進め、それらと年代との整合が達成されること、(2)それらを前提に、石器資料の分析から集団の行動型の変化を説明すること、などだという。ただし、あるいは旧石器と新石器は、この地域で必ず段階的に年代編成されるのかどうかなど(自戒的)ではある。

第四章 北東アジア新石器社会の多様性…大貫静夫

大貫論文は、極東の新石器文化について述べる。アムール川下流域(オシポフカ文化)から中国東北地方(燕山周辺)にかけて共通に見られる極東平底土器の出現において、かつては大きく前半と後半に分けたが、極東平底土器諸文化の時代においてその間の移行期の様相も明らかになってきたことから、中段階を設定し、大きく前、中、後の「三段階」に分け、これとあわせて地域別に展開過程を概観する。またこの社会における問題点について、自

説の見直しを含めながら主に考古学的編年観から検討を加えている。

著者も黄河流域以北を「北東アジア」のエリアとするが、極東の概念には中国東北地方や朝鮮半島も日本列島も入り、これが環日本海地域を括るもつとも大きなまとまりとする。この世界においては後期旧石器時代は、大局的には同じ細石刃石器群をもつ人々の世界であった。それが後氷期の更新世に移行する段階で、東シベリア、極東、中国という三つの大きな地域に分裂するという。ことに著者は東シベリア、中国とは異なる極東という地域的な枠組みが成立したと考え、そこには領域の特性に応じた生活様式があったと考える。すなわち、シベリア…遊動的な食料採集社会(移動式テント)、尖底ないし丸底の深鉢、中国…定住する農耕(食糧生産)社会(堅穴式平地住居)、土器は丸底の釜(煮沸具)、中間の極東…定着的な食料採集社会(固定的堅穴住居)だったとする。ことに極東では一貫して平底の深鉢が用いられた。これは「極東平底土器」と呼ばれ、これらの分布域が狭義の極東だとする。そしてオシポフカ文化の土器と燕山周辺の土器が「極東平底土器」の最古の一群であるという。ただし、日本ではこれ以降、丸底が発達することから、これらとは異なる極東の周縁の現象を示す地域だとする。

第五章 北東アジアの初期鉄器文化…村上恭通

村上論文は、北東アジア諸地域のうち、松花江流域、牡丹江流域、アムール川中・下流域、ロシア沿海地方の初期鉄器文化を概観した上で、さらに鉄器そのものを詳細に検討していく。

その意図は、地域間交渉の問題として鉄製品の検討を通じて、北東アジアにおける鉄器出現・普及期の地域間関係を考えてみることにある。

交渉の契機は中国の戦国時代後期、燕国の勢力が第二松花江流域まで進出することにある。続く前漢代には鉄器は一般集落（土器文化を伴いながら）にも普及しだす。以後、松花江、嫩江、アムール川流域へと伝播する諸文化は、この第二松花江が起点となっている、とする。一方、豆満江流域やロシア沿海地方といった日本海沿岸地域への鉄器の伝播には、朝鮮半島の基部を流れる鴨緑江流域（後の高句麗に含まれる地域）の動向が重要と指摘する。すなわち北東アジアへの鉄器普及の二つのルートを摘出する。第二松花江からアムール川へつながるルートと朝鮮半島の基部を通じて日本海側へつながるルートである。

ところで村上論文も指摘しているが、初期鉄器文化の区分と編年については、調査の粗密にも規定され「とくに編年や地域間の併行関係に対して、いまだ不確定要素が多い」という。この点を踏まえながら、玩味する必要がある。

第六章 草原の考古学：林俊雄

林論文は、ユーラシアの草原地帯における騎馬遊牧民の出現とスキタイの起源という北方ユーラシア史の二つの問題について、最新の発掘調査の成果や研究動向を紹介していく。すなわち、(1)馬という移動運搬手段をもつ騎馬遊牧民はいつごろ現れたか。(2)スキタイは、古代ギリシアの文献に登場する騎馬遊牧民の名称だが、そのスキタイの起源問題である。前者は、前四〇〇〇年紀の

早期説（前期青銅器時代）と前一〇〇〇年頃に発生とする後期説があり、両者の議論は平行線をたどったままだという。後者については、騎馬遊牧民の発生が前一〇〇〇年紀初めだとすると、それは先スキタイ時代とその直前に当たり、その時代の遺跡・遺物として注目されるのが、モンゴル高原のヘレクスル（大型積石塚）と鹿石だという。鹿石の年代は前九〜五世紀とする説が有力らしく、これに拠るとヘレクスルの年代も前九〜五世紀ということになる。

つまり早ければ、前九世紀頃、モンゴルの高原に騎馬遊牧民の集団の中から、これらを造営できる権力者が生れたことを意味するとする。関連して次掲の高濱論文も参照されたい。

「コラム」 モンゴル高原のヘレクスルと鹿石の発掘：高濱秀

高濱論文（コラム）は、ユーラシア北方草原地帯の初期遊牧民文化の起源に関して、モンゴル高原の青銅器文化の究明が重要であるという観点から、高濱秀・林俊雄氏ら草原考古研究会のメンバーが近年、モンゴル中西部で発掘している青銅器時代のヘレクスル（一種の積石塚）や鹿石（石の表面に鹿などを刻んだ断面長方形の高さ一〜三mほどの石柱）の調査の一九九九〜二〇〇三年までの情報を提供する。二つは遺構群として連関性が認められ、構造も明らかになりつつあり、日本の調査団によって、ヘレクスルと鹿石の年代がほぼ同じであることが確かめられた意義は大きいと結ぶ。

第一部の論者の大方は、大貫氏が言うように「新石器文化とは、

更新世から完新世へ移行する間の急激な環境変動への地域ごとの多様な適応の過程」なのだというのが基本的スタンスにある。すなわち動・植物相の転換⇨生態系の変化ととらえ、その意味では、伝播論者ではなく、相対的な史観ともいえよう。

第Ⅱ部 北東アジアの古代国家

第Ⅱ部は論文六本を載せ、東アジアの古代国家の周縁に位置付けられてきた北東アジアの諸民族は、それぞれの国家形成への過程で、どのような社会的・文化的変容を見せていたのか、という視点から述べられる。また酒寄論文は、かつての東亜考古学会の活動を丹念に跡付ける。

第一章 蝦夷と肅慎：冀島采紀

冀島論文は、日本の古代国家北部の住民（本州東北地方の住民と北海道もその範囲に含まれたとする見解）として史料に現れている蝦夷（エミシ）と肅慎（和語ではアシハセ）について、考古学の研究成果を踏まえながら、七～九世紀の日本古代国家の確立過程の中に位置付けて、交易と交流という観点から検討を加える。まずエミシと呼ばれた人々の実態を、続縄文文化の後北C2・D式土器や北大I式期の土壙墓遺構から見えていくが、三～四世紀あるいは五世紀代の東北地方の人々を「エミシ」と呼んでいいのか、「エミシ」概念の成立とも関わってくる問題である。また、本州北部のアイヌ語地名を取り上げ、「これは古代国家の成立以前にアイヌ語を使用する人々が本州北部に居住していたこと、ひいては続縄文人がアイヌ語を使用する人々であったこと、すなわちエミシ

系の人々の一部はアイヌ語を使用していたことの状況証拠となる」と結ぶ。一方、「肅慎」の実態については、五～六世紀頃に成立したオホーツク文化をルーツとし、直接的には七世紀代になってサハリンから道東・千島にかけてのオホーツク海沿岸部に分布していたオホーツク文化に当たる可能性を指摘する。肅慎⇨オホーツク文化説である。なお、七世紀の北海道の土器文化はまもなく擦文文化が始まろうとする段階である。「渡島エミシ」を当てても不当ではない。また、オホーツク文化拡大の背景に大陸方面とのパイプを想定し、中国史書に見える「流鬼」はサハリンのオホーツク文化に当たるか、とする。

冀島氏の主張のもう一つが有名な「交易港」（ボランニーの概念）論であり、氏はかつてより城柵を北方社会との「交易港」と位置付ける。それ以前、例えば養老四年（七二〇）の「靺鞨国」記事は、大陸のそれや渤海国のことではなく、オホーツク文化エリア内を想定する。つまり「アシハセ」になるか。それは南島に派遣された覓国使（くにまぎし）と同じ性格を有するもので、この時期の古代国家は、国司を現地に派遣しての貢納型支配をオホーツク文化の主要エリアにまで及ぼそうとしていたと考える。そして城柵の設置は、従来の国司が遠方の拠点を直接巡回するのから、エミシ側が朝貢に訪れる形態に移行したとする。後に、「肅慎」「靺鞨」は北方の夷狄たる「蝦狄」の一部に包摂されたと考ええる。

第二章 辰韓・濊・秦韓・新羅・統一新羅：東潮

「三国志」「魏書東夷伝」には韓半島における辰韓・濊などの諸国の動向が述べられている。この辰韓諸国は慶州盆地にあった。

東論文は、後の新羅の統一国家の成立に先立つ辰韓、濊、秦韓の諸国の墓制の様相を整理し、次いで新羅の墓制を見ながら、先行諸国が「新羅化」(統一新羅)されていく過程を述べる。

慶州盆地には辰韓時代の集落や墳墓が営まれているが、墳墓群からは三世紀代の馬形帯鉤が共通して出土しているという。この時期の辰韓の墓制は、木棺・木槨墓であるが、新羅時代になると積石木槨墳、横穴式石室墳が造営されていく。四世紀前半の新羅初期の段階はまだ木槨墓であり、木槨墓は積石木槨墳成立以前の墓制として位置付けられる、とする。三、四世紀代は隣接して濊(平壤一帯の楽浪郡、黄海南北道一帯の帶方郡にあたる)も存在した。新羅の墓制は、四世紀半ば頃に積石木槨墳が成立し、新羅独自の墓制として発達した。五世紀後半には巨大墳も造営される。それが六世紀後半、七世紀に積石木槨墳から横穴式石室墳にかわるといふ。はじめ横穴式石室は、慶州盆地の王京をとりまく縁辺に造られるが、統一新羅成立の六六八年以後、王京外に造営されるという。また、慶州の積石木槨墳の副葬品は身分制を示すという。例えば象徴的な山字形冠は五世紀中葉、金銅冠として出現した。これらは慶州の古墳群に集中しつつも、周辺地域にも分布し、新羅の勢力拡大と軌を一にする、という。

一方、新羅は五世紀後半以降、軍事力をもとに領域を周辺に拡大していくが、五世紀末以前の嶺東地域や小白山脈南麓地帯は、非新羅地域であった。ここは新羅に服属する以前は「秦韓」と認識されており、新羅進出以前のこの地域の五世紀代の古墳群では、横穴式石室が発達しているという(慶州盆地の積石木槨墳の墓制

とは異なるのだ)。しかしながら五世紀後半には新羅の領域に組み込まれる。このほか統一新羅の展開過程で、東海岸から日本の能登半島に遺民がわたってきたことを示唆する資料も述べている。論考は、非常に整理された内容となっており、せめて読者の便を図って韓半島の当該期の歴史地図を付せば一層よかつたと思ふ。

第三章 「靺鞨罐」の成立について：木山克彦

木山論文は、六世紀後半から七世紀初頭に中国東北部からロシア極東部(第二松花江、豆満江、ロシア沿海地方、牡丹江、三江平原、アムール川流域など)に口縁部に特徴ある斉一性の強い深鉢形の土器が広く展開(これを「靺鞨罐化」と称している)する中国側呼称で「靺鞨罐」といわれる土器をトピックに、靺鞨罐初期と前代の土器群を整理し、靺鞨罐の成立過程について考古学的に検討したものである。

はじめに靺鞨罐成立前代の様相を、近年の新資料を加えながら、研究史を踏まえて各地域ごとに年代や地域間関係について整理し、土器は基本的に非ロクロだが、一部にロクロ整形も見られることを指摘する。これはまた初期靺鞨罐の構成と系譜でも同様の現象を示す。これを受けて靺鞨罐の成立過程に関わって、靺鞨罐の起源地はアムール川中流域・三江平原北部周辺と想定する。ただし成立過程においては、確かに前代の土器群構成を大きく改変し、斉一的な靺鞨罐が広範囲で製作・使用されたことが確認される一方で、靺鞨罐初期の構成には地域差があり、それらは前代の土器群伝統を反映しているのだ、とする。靺鞨罐の影響は、サハリン、

北海道北岸、オホーツク海北岸にも及び、北海道においてはオホーツク文化「刻文土器」となって現れている。

第四章 東亜考古学会の東京城調査：酒寄雅志

酒寄論文は、八世紀に造営された渤海国の上京龍泉府の都城跡（後世「東京城」と呼ばれた）の発掘調査がどのような背景のもとで東亜考古学会によって実施されたのかという問題点を、外務省記録やいくつかの当時の発掘日誌を博捜しながら、調査の経過を詳細に検討したものである。東亜考古学会の調査は、抗日ゲリラの活動が激化する中、警察や軍隊に守られながら昭和八・九年度（一九三三・三四）の二年間行われた。

著者は八年度を東京城第一期調査（六月実施）、九年度を同第二期調査（五～六月実施）に分け、調査行からはじめて、その経過を詳細に追っていく。第二期の宮殿跡調査の際、いわゆる「和同開珎」の発見がある。結局、東京城調査は昭和七年に満洲国が建国された直後の事業でもあり、その意味ではきわめてタイムリーであった。換言すると、外務省や日本国政府にとつても日滿の友好の淵源は日渤海の友好にあり、満洲建国もそうした歴史的名分のもとに行われたことを、この調査に確認・証明することとなったとし、学界と国策の利害が一致した事業と総括する。国家がいかにバックアップしたかということでもある。

第五章 クラスキノ城跡井戸出土土器群の考察：小嶋芳孝

小嶋論文は、ロシア沿海地方南部にある、クラスキノ城跡石組井戸の発掘調査によって得られた多数の完形土器である渤海土器の一括資料を紹介し、井戸出土土器群の年代と使用形態を考古学

的に再度検討したものである。その背景に九二六年の渤海滅亡を考える。

井戸は寺院地区に設けられている。一括土器は陶質土器二点あり、うち著者が実測できたのは一六点で、器種は壺、鉢、蓋の貯蔵形態に限られるという。個々の土器に詳細に検討を加え、その年代観については、共伴した契丹系長頸壺の形態から一〇世紀第一四半期頃を中心とすると判断している。一括土器の使用形態は、煮沸具が見られないことから、井戸廃絶に係る廃棄儀礼に伴う土器群と推定する。すなわち井戸の廃棄は、寺院の廃絶を象徴する儀礼だったかと考え、それは年代的に見て、九二六年の渤海滅亡に伴う混乱と関連した現象とリンクする可能性を指摘する。井戸の廃棄儀礼からも歴史の一齣が見られるという好論文。

第六章 女真の考古学：白杵勲

白杵論文は、一〇～一三世紀の渤海時代から金・東夏期の女真の社会の様子を、発掘調査が進んでいるアムール川、松花江各流域、渤海の中心地のひとつである牡丹江流域、アムール川流域と沿海地方をつなぐウスリー川流域、沿海地方の考古学資料を用いながら概観し、あわせてその成立過程や社会の実態を把握しようとするものである。記述は学説を再整理しながら、資料の見直しを行い、かなり詳細な出土土器の群の検討を通して、さまざまな文化領域の設定を行うなど非常に手堅い印象を受ける。

女真とは、一〇世紀頃から正史に登場する集団の名称であり、その居住地は現在の中国東北地方・ロシア極東・東北朝鮮に当たるとされ、とくに渤海滅亡後の当該地域の住民として記載が多く

なるという。女真の前身は、南北朝から唐代にかけてこの地に居住していた「靺鞨」（当集団を核に後に「渤海」が建国される）であり、靺鞨族主体の渤海国が滅亡後、現地に残った人々が「女真」と称されるようになったという。やがて、一二世紀初めに「生女真」族により、女真勢力は統一され、支配者の契丹国からの独立を果たし、「大女真金国」（金建国）が建てられ、しだいに華北を版図に組み入れる大勢力へと成長していったことを述べる。また、臼杵氏は渤海滅亡前後の土器様相を示す資料として、クラスキノ城跡出土土器を取り上げている。いわゆる井戸一括埋納の陶質土器の一群である。この中に契丹系の土器があることを指摘している。

第三部 環オホーツク海の古代世界

第三部は、オホーツク文化の人たちどのような民族的系統の人たちだったのか、オホーツク文化に先行する文化とオホーツク文化の終末の様相、擦文文化との関わり、アイヌとの関係などオホーツク文化をめぐる主要な問題点が論文五本に述べられる。

第一章 オホーツク文化を担った人々：石田肇

一般にアイヌは北海道、サハリン、千島の三地方群に分けられる。そのアイヌはいつからこの三地域に暮らし始めたのか、なぜ三地域のアイヌは形態的に違ってきたのか。この問題を解くひとつのヒントが、オホーツク文化を究明する中にあるという。なぜならオホーツク文化はこの三地域すべてに関係し、この差を考えるとアイヌの地域差を考える上で、一つのキーになるからだという。つまりオホーツク文化人とはどんな人か。この課題に迫

るために著者の石田氏は、解剖学・形質人類学的手法で人骨にさまざまな分析を加えていく。また並行してアイヌとの関係をも追っていく。

はじめにオホーツク文化人の骨の特徴を、モヨロ貝塚出土の男性頭骨から述べる。全体に顔が大きく身長が高い。この特徴は、北アジアのシベリア・極東の寒冷地に暮らす人々と共通するという。次いでアイヌの骨格形態、本土日本人の骨格形態の諸特徴に及ぶが、時間的・地理的な広がりで見ると、オホーツク文化になって、北海道の東北部に北アジアの人々の形質をはっきりもつ集団が現れたと考えてよいとし、地理的にも人骨資料にいくらかの差異が認められるにしても、サハリン南部、北海道のオホーツク海岸、千島列島にひとつのまとまった群としてオホーツク文化を担った人々がいたようだとする。また、近隣諸集団との関係において、オホーツク文化（人骨）は、北東アジアのどこの人々の形態に類似するののかという問いでは、近隣諸集団との比較を試み、サハリンやアムール川下流域のあたりを源郷とするようだが、それを証明する同時期の人骨が未発見なところから結論を保留している。そして最後に相互に連関性が想定されるアイヌとの関係については、オホーツク集団はアイヌや縄文時代人骨にも類似する特徴をもっており、この三集団に何らかの共通性があることを感じるといふ。また、DNA比較からもオホーツク文化人骨がアイヌ集団の形成に関与している可能性を示唆すると結ぶ。

内容は非常に整理されて論が展開され、わかりやすい文章の典型例といえる。それはトピックをどのように組み合わせられるか

に係るといふ事例でもある。

第二章 オホーツク文化成立以前の先史文化：福田正宏

北海道において考古学上のアイヌ文化が形成されるのは一四世紀からであり、その前は擦文文化とオホーツク文化があった。オホーツク文化は、サハリン南部から北海道、南千島を中心とするオホーツク海沿岸に広がるが、在地で生産されなかった鉄製品や墓の副葬品から交易関係を分析すると、中期まではアムール方面に展開した靺鞨・女真文化方面、後期になってからは擦文文化さらには本州側の律令国家体制を強く指向していたことがわかるという。福田論文は、生態環境のひとつ森林景観から見た極東ロシアと北海道との間の関係論として、旧石器・新石器時代の概観を行うが、それはオホーツク文化に先行する文化についても、発掘調査資料に即した国際的な調査研究が可能になってきたからだとする。ただし、大陸と北海道との間の交流論（交易・交換）を説く前に、まず時間軸に沿った文化配置関係の把握と、各地の生態環境に適応した社会組織・生活構造の復元作業が必要だという。また、大陸・北海道間の関係論では、アムール川下流域・サハリン・北海道という間宮海峡周辺の諸地域に注目して、これらの地域における新石器時代以降の文化変遷や生活構造について紹介している。さらにシベリア型の食料資源の広がる地域である間宮海峡北辺域にも注目しつつ、アムール川下流域の新石器文化の変遷についても諸説を紹介していくが、現状の調査研究の成果からは、北海道とアムール川下流域方面の新石器文化は、互いに無関係に存在したと判断している。

書評と紹介

新石器時代あるいは縄文時代に特有であったサハリン内に南北に二分される文化の対置関係は紀元前後に崩れ、この前後のサハリン中・南部と北海道北端部では鈴谷式土器が広がる。もともとアムール川河口域では「ウリル系土器」が展開し、サハリン北部出土の土器もこれに関連深いものが目立つという。したがって、間宮海峡北辺域はアムール川系の圏内に含まれるとする。これが鈴谷文化期になると南北の土器文化が大きく融合しだすという。鈴谷式土器（文化）がオホーツク文化の成立に関して重要な画期となったことは周知のところである。そして生態環境及び考古学的に識別される文化配置から新石器時代以降の文化変遷を見る限り、北海道は、アムール・東シベリアなどの北方系の影響をほとんど受けておらず、むしろ本州方面の南方との関係が持続的に存在した道南と、さらにその周縁形態の占める道東北とで構成される地帯ととらえるべきと結論する。

近年、著者らによつて進められているアムール川下流域の新石器時代の遺跡調査の成果に基づいて、北海道と大陸の文化の関係を生態環境の視点から見直そうとする論考である。

第三章 オホーツク文化前期・中期の地域開発と挫折：天野哲也
天野論文は、かつてオホーツク文化前期後半の活発な領域拡大行動に関連するものとして注目した奥尻島青苗砂丘遺跡について、さらに中期まで範囲を広げて、オホーツク集団としての動向を分析したものである。青苗遺跡は、日本海側で確認されたオホーツク文化の遺跡としては最南端の事例であることは周知のところである。分析には主に三遺跡をトピックにあげる。

このうち礼文島香深井1遺跡の二号竪穴住居のある集落は、前期後半末にサハリン南西部の母村(冬季中心)から分村(夏季のキャンプ地)する形で創設されたものだとする。さらに奥尻島青苗砂丘遺跡の縄目文をもつ土器と、香深井二号住居例の酷似するほどの類似性に注目し、その意味を考え、当時サハリンから全道に及ぶ広域的なネットワークが機能していた可能性を指摘する。あわせて『書紀』の肅慎(あしはせ)が佐渡嶋に到着し、漁撈活動を行っていた記事についても、同時期のオホーツク文化前期後半(六世紀中葉頃)の活発な領域拡大行動の延長線上にこの「肅慎」を位置づける。また、奥尻島宮津チャシ遺跡採集の三点のオホーツク式土器は、中期の七世紀前後に位置づけ、これについても『書紀』の阿倍比羅夫軍と肅慎の戦いの記事を引用し、要害である「柵」を宮津チャシ遺跡に比定するのがふさわしいとする。オホーツク人Ⅱ肅慎説に立つものである。

青苗遺跡のオホーツク文化の住居跡とその土器が、礼文島の香深井1遺跡二号竪穴住居跡とその土器に類似していることから、オホーツク集団の礼文島から奥尻島への南下、さらには佐渡島までも想定する論考となっている。

第四章 元地式土器に見る文化の接触・融合：熊木俊朗

オホーツク・擦文両文化の接触・融合に関する事象のひとつが「元地式土器」である。熊木論文は、オホーツク文化の終末期に擦文文化との接触・融合によって出現した元地式土器に関する最新の研究成果に基づいて、主に香深井5遺跡出土土器の型式学的検討を通じて考察したものである。北海道では、オホーツク文化と擦

文文化が接触・融合していく過程を示す例として、道東部に展開したトビニタイ文化が有名であるが、一方、このトビニタイ文化とは異なる「融合」の過程が、礼文島、利尻島、稚内市周辺を中心とする北海道北端部でも確認されている。その「融合型式」が元地式土器である。これら道北端部の「融合」過程を、元地式土器とその後の土器様相の分析を通して明らかにする。この地域は、サハリン・日本海沿岸・オホーツク海沿岸の三つのルートが交錯する交流の要所であり、元地式土器に関わる問題のもつ意味も決して小さくはない。ことに融合過程に関しては、宗谷海峡を跨いだ道北端部とサハリンの交渉が大きな役割を果たしていた可能性が高いという状況が土器型式に現れていることを指摘する。それは型式学的特徴と系統の分析、器種組成の検討とその背景などの分析結果に基づくものである。そして結論として、元地式土器は道北部のオホーツク土器、サハリンのオホーツク土器、擦文土器の三者の要素を併せ持つ一方で、どのグループからもスムーズな系統的変遷をたどることが困難な土器型式だとする。

第五章 国後島の大規模竪穴群と擦文文化：澤井玄

澤井論文は、詳細な地形図・航空写真・衛星写真を利用し、北方領土と呼ばれる国後島・択捉島において、竪穴群と思われる地表面の窪みの集まりを複数確認することができたとする報告である。具体的な調査が困難な現状にかんがみ、その検討結果を示したものである。ことに国後島南端部の泊平野において大規模な窪地の密集地帯が見られ、解析した結果、五つのグループからなる計七〇〇以上の縄文期からオホーツク文化期・擦文文化期に至る

堅穴の残存痕跡だとする。地形的には海岸砂丘及び河川兩岸の低段丘面に多数の地表面の窪みが存在するかたちである。その窪みを対岸の根室半島の同様の事例（発掘例も含めて）で検討し、立地が擦文期に典型的なあり方を示すこと、方形の窪地であることなどから、国後島のそれも堅穴跡と考えられるとした。これは空間分析の方法論の一つで、プロセス考古学の手法であるが、実体写真利用による情報の検索は、地理学や考古学では基本的資料操作の一つでもある。

第Ⅳ部 北東アジアの中世世界

第Ⅳ部は、中国における強力な王朝の成立、ことにも北アジアにおける大モンゴル国の成立が周縁の北東アジア諸民族の動向に及ぼした影響を中心に、大モンゴル国の遺跡調査から得られた新見も合わせて論文六本に述べられる。各論文には時代や地域を異にしながらも「交易路、軍事拠点」という共通視角が見られる。

第一章 北日本の古代末から中世…小口雅史

小口論文は、「古代末から中世にかけての史的展開」がテーマだとするが、実は中世の世界への変質過程を考えることは、それほど簡単なことではない。まさに小口自身が言うとおりである。本論では、第一の画期を一〇世紀初頭、第二の画期を一二世紀以降ととらえながらも、時代を超えた特色である「交易と交流」に重点を置き、その間に位置する安倍・清原・藤原・安藤の諸氏の段階を切り口に論を展開する。ところで北方交易の特徴とは、鉄・須恵器（陶器）・布・米・塩等であり、北方からもたらされた産物

とは、金や馬・毛皮（獣皮）類・鷲の羽・昆布等である。この北方交易の統括の主体者が、安倍氏・清原氏・藤原氏と在地勢力主体に発展していくことを指摘するが、その中で福島城を古代の城柵類似の施設と見る点について、それを「過大評価」として批判しているが、首肯できよう。同様の指摘は、北奥の官衙類似施設かとされる新田（上）遺跡をめぐる評価でも行っており、評価は慎重になるべきとする。むしろ在地性の側面に留意すべきだという。ただし、交易の拠点性については認めている。これについては、交易と交流を背景にした産品をめぐる争いがあり、これが北奥にこの地方特有の壕で集落を囲んだ、いわゆる「防御性集落」を発生させたとする。一〇世紀半ば頃である。それが最終的には平泉藤原氏の台頭によって防御性集落は消滅したと考えるものである。防御性集落論の構築はいまだ途半ばである。

第二章 契丹国（遼朝）の成立と中華文化圏の拡大…武田和哉

契丹の居住地は、シラムレン川とその支流であるラオハ川流域である。武田論文は、当地域が中華文明の受容に有利な地理的位置にあることを説き、唐代の墓誌の影響を受けた契丹の墓誌資料を駆使して、自己を中華的秩序の中に位置付けるといふ契丹の中華化を論ずる。

後漢以降、この地にあつた鮮卑は南下して北魏を建て、その後新たに当地域に拠つたのが契丹であつた。契丹は北魏以降、隋・唐の支配を受けつつ、またモンゴル高原を中心とする突厥・回鶻（カイコツ・ウイグル族）などからも大きな影響を受けたが、本地域は、古来より中華世界と遊牧世界との結節点であり、ここを本拠とし

た契丹は、王朝国家と帝国の興亡の狭間で民族としての存在を維持してきたのであり、そこには双方から受容した政治・文化の要素を併せもったと考えられるという。一〇世紀に生じた巨大国家である唐・回鶻の衰退という事態において、これらを継承して契丹族によって契丹国（遼朝）が建設された。一〇世紀初めのことである。本論は、契丹国の成立過程や建国後の様相を包括的に概観したもので、契丹の政治制度では、各朝を通じて漢人が主たる地位や重要な役割を占めていたこと、社会組織においても近年出土の墓誌資料の分析から、制度的・文化的にも中華の制度への価値観の同質化が見られ、それはまさに「中華化」なのだとする。

以上より、契丹族が古来より中華の諸文化と一定の接触があり、漢人も多く居住していたシラムレン川流域より興ったこと、また唐代に羈縻支配を受けて国際秩序の中に組み込まれた経緯があること、また建国に際しては漢人の力を利用したことなどの諸事実があり、そこから歴史的に中華や漢人との接触・交渉の存在が背景にあることが明確になってくると総括する。

第三章 イエケⅡモンゴルⅡウルの成立過程：白石典之

モンゴル族の祖先は、アムール川上流域の支流、アルゲン川流域におり、後のイエケⅡモンゴルⅡウルスとは、大モンゴル国の意だという。白石論文は、初代君主チンギスⅡカンによって建国された「モンゴル帝国」と呼ばれるイエケⅡモンゴルⅡウルスという、大モンゴル国の政権の特質を「社会組織の進化」という視点から考えたものである。そのために、他の政権・国家との成立過程との異同を比較して、その特質を明らかにしようとしている。

資料には、アルゲン川上流域のアウラガ遺跡の集落跡や鉄製品の工房跡の考古学的調査成果を基礎にする。社会組織の進化は、大別三段階に分けて論述される。氏族社会から部族社会へ（六一―一〇世紀）、部族社会から首長制社会へ（一一―一二世紀）、首長制社会から国家へ（一三世紀前半）である。第一段階はまだアルゲン川流域におり、半猟半牧の民で、墓制から見てもほぼ格差のない社会と推定する。一方、この頃アルゲン川に合流するシルカ川流域には、土塁と壕に囲まれた大集落が出現し、ここでは戦争を想定している。この後、シルカ川水系中心に人口増加が起こり、部族社会へ移行していったとする。また周辺諸民族からの圧迫と干渉は、モンゴル族の社会的統合の促進と、固有文化の形成を押し進める契機となった。第二段階の一世紀中頃、社会化の進展は見られても、モンゴル族はまだ部族段階であった。しかし、戦乱が激しくなり、この中からアルゲン川流域の集団の再編が加速したらしい。また生態系の環境変動も加わり、増えた人口を養うため、モンゴル族は新天地を求めてアルゲン川流域の西の後バイカリエに移動を始めた。この間も一帯では各地で部族間戦争が発生しており、この中から征服部族と被征服部族が現われ、部族間に階層差が生じた。また戦争リーダー層も形成された。モンゴル族内のリーダーの有能者はやがて政治的リーダーになった。一世紀後半半頃である。この頃モンゴルは契丹に朝貢している。チンギスはこのモンゴル族のリーダーの子孫から選ばれたのである。リーダーが特定氏族に世襲されることこそ首長制の指標であり、首長制段階に社会が進化していったのである。第三段階の一三

世紀初頭、チンギスは他の首長制社会を破り、支配下に入れた。一二〇六年「イェケルモンゴルウルス」と呼ばれる統一政権の権力者に就いたのである。このチンギス政権は、かなり国家段階に近いものであったと考えている。また遊牧初期国家という概念を提示もしている。大モンゴル国はユーラシア規模で通信・交通網を整備し、東西交易を促進させたという評価がなされている。工房跡の調査から鉄資源を中国から輸入し、鉄製品の生産を行っていたと考え、その実態は中央政権によって鉄器も独占的に管理するシステムが存在したと想定し、これらの事例は次の社会進化の段階、つまり「国家」という強力な政権下でなければ実現しないとする。

その記述には、チンギス・カンに事例をとった文化人類学講座の趣がある。

第四章 モンゴル高原から中央アジアへの道

―三世紀のチンカイ城を通るルートをめぐって―：村岡倫

一三世紀初頭、モンゴル高原の統一を果たし、政権の座についたチンギス・カン、アルタイ山脈の北麓に軍事基地を開き、チンカイ鎮海屯田を置いた。モンゴルにとつてのチンカイは遠征の拠点や最前線基地として重要な位置を占めた。村岡論文は、このチンカイ城の考古学的調査成果に基づいて、当地域が中央アジアとの重要な交易路であり、中央アジアへの進出の軍事拠点であったことを述べるものである。チンカイ城は、ハルザン・シレグ遺跡に比定され、一辺約二〇〇mの正方形の土城跡で、一二世紀後半―一三世紀初頭、のものである。チンギス・カンもチンカイ城

書評と紹介

を拠点として中央アジアへの征西に出発したと考えられるとし、この時点で、チンカイ城を経由するモンゴル高原から中央アジアへの道が確立していたとする。この交通路の歴史を考えると、チンカイの地がどのような意義をもつのかを考察している。それは五世紀のトルコ系高車国の根拠地や、六世紀突厥の発祥地に隣接する地域であったのであり、元來がこのルートは重要な交通の要衝でもあったのだから。

第五章 「北からの蒙古襲来」をめぐる諸問題：中村和之

中村論文は、主に「元史」などの一三世紀後半中心の動向から、サハリンへのモンゴル軍の進出は北方から日本への攻撃であったという榎森進や、元軍のサハリン島出兵には日本列島遠征という目標があったとする大葉昇一らによって提起された問題に批判を加えたものである。中村は改めてサハリン南端部の白土城（果夥）やアムール川河口に近いヌルガン（奴兒干）都司の再検討を含めて自説を補強している。白土城は確かに版築技法などから大陸的造営法である。だが、白土城の調査成果を援用するには年代決定の根拠となる土器の出土がないなど考古学的に見て、いまだ資料的には決定的に不足である。遺構論のみに立脚する危うさはすでに前例があるからである。また白土城が防御的かどうかも判断を下すには早計であろう。

第六章 ガラス玉の道：越田賢一郎

中国の一八世紀前半に著わされた「寧古塔紀略」には東北アジアにおける貂皮交易の記載とともに「糯米珠（もちごめだま）」という語が見られる。越田論文は、この用語を「ガラス玉」のこと

であり、一七世紀頃から日本の山丹交易関係文献に現れる「青玉」と呼ばれる玉に当たるとする。そのためには次の3点が解明される必要があるという。(1) 糯米玉がガラス玉を意味すること、(2) アムール川の支流、松花江、牡丹江の三姓や寧古塔で行われていた貂皮交易により、ガラス玉がアムール川中・下流域及びサハリンに運ばれていたこと、(3) 日本の文献の「青玉」がガラス玉であり、アムール川中・下流域及びサハリンから北海道へ運ばれていたこと、である。そして清朝の辺民制度や山丹交易について触れながら、いくつかの交易形態(流通の形態)にも言及しつつ、「ガラス玉」の道について考え、この仮説が成り立つことを証明する。結局、『寧古塔紀略』に見える「糯米玉」と江戸時代の文献に見える「青玉」とは、ともにアムール川中・下流域及びサハリンに流通していたガラス玉を指すと考えられるとする。

第V部 北東アジアの民族接触

第V部は、北東アジアの諸民族の一七〇―一九世紀の近世における動向をトピックにした論考が五本とコラム一本に述べられる。千島列島の概念の問題や交易品における言語の問題など、今後の北東アジアの歴史と文化の研究の一つの方向性を示す内容である。

第一章 明代女真氏族から清代満洲旗人へ：杉山清彦

一三世紀の金の滅亡後、マンチュリア(主に黒竜江・ウスリ江・松花江・牡丹江・豆満江流域一帯)に散居した女真人(ジュシェン諸集団)は長くモンゴル帝国・明朝の支配下に置かれていた。杉山論文は女真の諸氏族が、一七世紀の初めにヌルハチによって

後金国が建国され、四〇〇年ぶりに統合を果たした歴史をその変遷(元明交替期から明清交替期まで)を含めて詳細に述べる。その後、後金改め大清国になることは周知のところであり、その支配層はヌルハチの子孫たる、マンチュリアに出自する女真改め満洲人(マンジュ)であった。

元代から元明交替期の女真(明代は女直)諸集団は、マンチュリア各主要河川流域に散居しつつ、次第に南下しながら新しい秩序に再編されていった。このような中で一五世紀の初め、明朝の積極的な朝貢勧誘策に応じて、女真人首長が相次いで入朝してきたという。物資に乏しく対明交易に依存せざるを得ない女真諸勢力であったからだとする。一方、一五世紀末以降、マンチュリアでは在来の首長権の弱体化が起こり、急速に勢力交替とそれに伴う政治秩序の再編が進んだという。原因の第一は、在来首長権の弱体化だが、第二が明側の朝貢制限策への転換と貂皮・人参貿易などの急発展があるとする。巨額な利益を生む貿易利権を掌握し、管下を強力的に統制する新興勢力が急速に台頭したためである。こうして、一六世紀後半には、渾河上流域から鴨綠江流域にかけて建州三衛(一五世紀に成立)に代わってマンジュ五部が形成されていた。

この中の王杲は新興勢力として台頭した代表で、一六世紀後半には蘇子河・渾河流域の三部を押さえたが、後に明に討たれた。同じ頃、渾河流域で勢力を築いていた王兀堂も明軍に敗れ、五部内各地では中小勢力が対立を繰り返す状況が生まれた。ことに蘇子河・渾河流域の三部には多数の豪族が並び立ち、その一人が、

ヘトウアラ盆地の一角に拠った若きヌルハチであった。彼は六年でマンジュ統一を果たし、マンジュ五部を率いた。これがヌルハチのマンジユ国(グルン)「一六一年以降」(後金)とも)であり、その組織としたのが八旗制であった。八旗は、在来の諸集団を再編したものを基礎単位とし、四色旗からなる八つのグサ(軍団の意)、つまり旗を最大単位とする軍事行政組織のことである。彼らは明代にあつては、領主氏族が配下を率いて割拠し、清代に入つてからは八旗制のもとに組織され、旗人として清一代を通じて帝国の支配層とその領民を構成したといえよう。明代女真(ジュシエン人)の社会集団を清代にはマンジュ八旗に編成する図式が描けよう。その過程がジュシエン改めマンジュ氏族でもあつたのである。

第二章 近世日本から見た千島列島史：菊池勇夫

千島は元来、一二世紀頃より蝦夷が住む数多くの島々という意味合いの「蝦夷が千島」「千島の蝦夷」に由来するとされる。しかし、近世になると「蝦夷が島(北海道)」と区別して「蝦夷の千島」ととらえようという認識が次第に強まっていたという。事実一八世紀前期頃成立かとされる『蝦夷島記』は「蝦夷の千島」は蝦夷島(北海道島)の東の方にある島々、すなわち千島列島を意識して使っていたようだという。菊池論文は、一七世紀以降に千島と呼ばれる列島、あるいは島々はどこを指しての呼称であつたのかを文献を駆使して検討し、その概念が意外に不定見であることを指摘する。それはまた我々の認識の甘さへの警告ともなる。

一七世紀の千島列島についての情報はきわめて乏しいという。

書評と紹介

地図上で、千島列島が幕府の国絵図などに書き込まれるのは一七世紀中葉である。この中にクナシリとクルミセノ島が大きく描かれるとともに「エソ多シ」とあるといい、一七世紀末〜一八世紀前半になると、絵図は千島方面に志利恵止古島、女人島、クルミセシヒユタン、久奈尻、狺虎島、エトロツフ島を描くという。一八世紀、地理情報が確実になってくるに従つて、「蝦夷島」を「千島」と呼び難い感覚が生じ、「蝦夷島」を除いた東海の島々に「蝦夷の千島」を当てようとしていくのだろうと考えている。一八世紀後半になると、蝦夷(北海道島)と区別してクナシリ島からシムムシユ島までの列島(千島列島)の全体を指して千島と呼び始める。だがまだ、「千島」の概念は定まっていない。明治政府は一八六九年(明治二)、蝦夷地を北海道に改め、渡島国以下の一ヶ国を定めた。このとき千島国の国名が生まれ、国後・択捉・振別・紗那・薬取の五郡が成立した(以上、エトロフ島)。一八七五年の樺太千島交換条約によつて日本領となつたウルツフ島以北の島々も千島国に含まれ、得撫・新知・占守の三郡が置かれた(クリル群島)。色丹島が根室国から分離されて、千島国に編入され色丹郡となつたのは一八八五年のことだとする。すなわち、北海道や千島が特定の範囲を指す日本国の行政区の呼称となつたのは、日本近代国家の成立とともにであつたという。

第三章 漂流民が見た千島のアイヌ：川上淳

川上論文は、近世の千島列島の島々への漂流の記録をとりあげ、それを詳細に検討することで、千島列島とそこに住むアイヌの人々の歴史の一端を明らかにしようとしたものである。ここでいう「千

島」あるいは「千島列島」とは北はシムシユ島から南はクナシリ島までの約二〇の島々をいい、便宜的にシコタン島とハボマイ群島を含めて論述する。

その記録を整理すると、日本から千島やカムチャツカ方面への漂流記録の最古のものは、エトロフ島漂着の一七世紀中葉であるという。ここではエトロフ島アイヌの衣・食・生業などの風俗が記述され、米を知らなかった、ラッコ猟を行っていた、衣類が毛皮であるなどが述べられている。以下、一八世紀初めのエトロフ島漂着（タバコ、キセル、刀、日本製品が流入）、一八世紀中葉のエトロフ島漂着（米を知っている、木綿が入っていた）、一八世紀中葉のシコタン島漂着、一九世紀初めの北千島のパラムシル島漂着、一九世紀初めの千島のハラマコタン島漂着などを紹介している。このなかで興味深いのは、漂流物の取り扱いにおいて、漂流民が着ていた木綿製と思われる着物を当然のように剥ぎ取っている事実は、漂流物は「天からの恵み物」という認識があったことを示すと理解していることである。

第四章 サンタン交易の経済学…佐々木史郎

日本の近世にあたる一七―一九世紀、アムール川流域、サハリン（樺太）、北海道の住民が中国と日本の間で、事実上の仲介交易を行っていたことは広く認められてきている。いわゆるサンタン（山丹）交易である。佐々木論文は、このサンタン交易の経済的側面に注目し、「サンタン、スメレンクルの商人たちが、日本と中国との間の仲介交易で取り扱った商品の価値、価格、さらには交易を通じて得られた彼らの利益に焦点を当てながら」その特徴につ

いて明らかにしたものである。また、どの程度の利益を上げることができたのかまで分析している。

データは一八世紀末頃、松前藩がサハリン南端に設けた白主会所での取引に基づく。ここは幕府の政策の変化があったにもかかわらず、設置以来一貫して日本側とサハリンのアイヌやサンタン、スメレンクルの商人などとの取引の場所とされたところである。そこではサハリン産のクロテンを基準として、絹織物、綿織物、衣類、鷲・鷹の尾羽、ガラス玉などのサンタン将来品の価格が定められ、同時に日本側が払う毛皮類や鉄製品の交換比率も定めてあった。しかしながら、表面上は物々交換のように見えていたサンタン交易でも、ものの交換の基礎に中国の共通の価格単位「ヤン」が存在したということは、この交易がすでに貨幣の存在を前提とした高度化された取引であったということを意味するとしている。日本側は共有していなかったが、少なくとも漢族商人、満洲商人からサンタン、スメレンクルまではこの価格単位を基礎に取引を行っていたわけである。すなわちサンタン交易とは「未開民族」の物々交換の連鎖による物流ではなく、貨幣に裏打ちされた価格単位の存在を前提とした等価交換による高度な経済活動だったと結論する。試算では、サンタン商人たちは白主で大きな利益を手に入れることができたのだ。

第五章 セイウチの来た道…津曲敏郎

津田論文は、環オホーツク海におけるセイウチの牙交易を、交易ルートに関わる諸民族の言語の面から検討を加えたものである。もともと北海道のオホーツク文化遺跡から出土したセイウチの牙

製品の素材であるセイウチの牙は、カムチャツカ半島南部から千島列島経由、またはオホーツク海北岸地域から北西岸を經由して、交易によってもたらされたと考えられ、さらにこの交易ルートは唐代以後の中国にも及んでいたことも跡付けられているという。津田はセイウチの棲息域は、カムチャツカ半島中部以北のベーリング海と北氷洋と限られており、交易品として珍重された牙とともに、セイウチを表す単語もまた北から南へと伝えられただろうと考え、その間に居住する諸民族におけるセイウチに係る表現問題を追っていく。方法は、はじめに日本語「セイウチ」の語源など、次いでサハリンの諸言語における状況を概観し、さらにアムール川流域からオホーツク海北岸へと至るツングース諸言語中に関連する単語を探る。これらをチュクチ・カムチャツカ語族の語形と比較することで、いわゆるセイウチの旅した道を逆にたどってみることにするという。チュクチ・カムチャツカ語族では、セイウチのほぼ同原語が見られ、出発点と目されるもので、牙を表す語は遠くチュクチ・カムチャツカ語族から北方のツングース語經由で伝わってきたと考えられるからである。

それが成功したかは、評者の力量を超えるのでコメントできないが、例えば、一見して樺太アイヌ語の *soj* 「セイウチ」は、ニヴフ語「牙」を表す語と類似しているという。セイウチが棲息地以外では、もっぱら牙の形でしか知られていなかったから、このような意味変化が生じるのだとする。また北海道アイヌではセイウチに当たる語はないようだという。日本語のセイウチの語源はロシア語の音セブチャ（トドの意）かららしくここにはセイウチの

意はなく、まさに取り違えの結果とされる。

「コラム」『秘帳坎々奇話』と『北征秘談』：松浦茂

松浦論文（コラム）は、主に文化・文政期の一九世紀前半に幕府の一員として蝦夷地に派遣された高松藩士本木謙作が著した、蝦夷地の様子とロシアの蝦夷地への接近の実状（例えばロシア人による襲撃事件やその後のパニックなど）を精緻に報告している稀覯書「本」の紹介である。『秘帳坎々奇話』は地肺山人著、『北征秘談』は本木著であるが、実は同一人物による記述内容であることを指摘しながら、その背景を考えているエッセイ。

以上、三〇編の論考を紹介しながら、若干のコメントを付してきた。このあと、「あとがき」、「索引」（人名、事項、地名・遺跡名）を収載する。

本書は、北東アジアの歴史学、考古学、民族学、文化人類学、言語学、考古地理学などの方法論を網羅したものともなっており、その分析視角に多くの学ぶべき点がある。若い方々にも教科書的な意味で、是非一読を薦めたい一書である。

（二〇一〇年二月刊）A5判 五八二頁 定価七二〇〇円＋税
北海道大学出版会